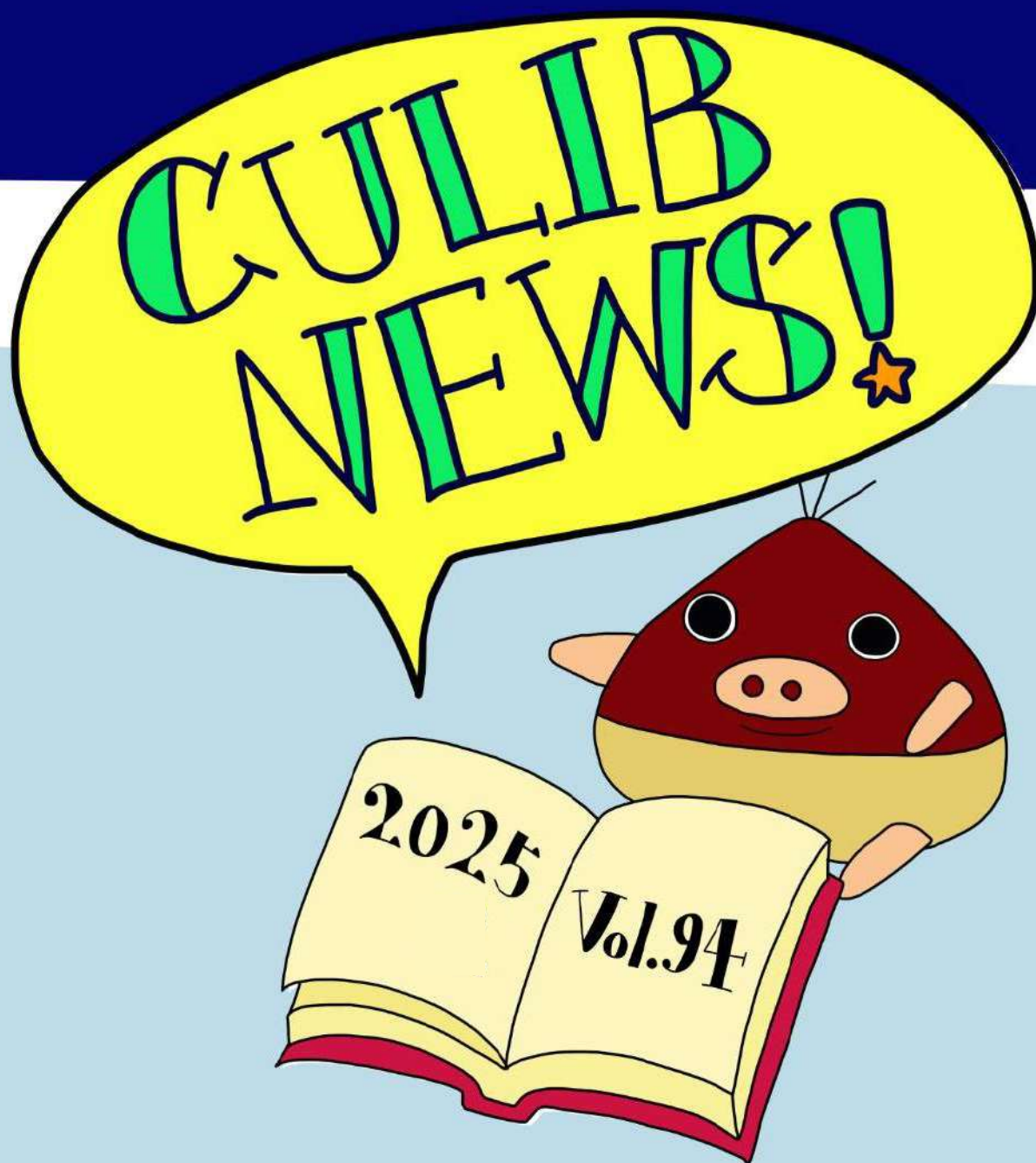




Main Contents

- 中京大学生向け！名古屋図書館 館内マップ
名古屋図書館の館内マップの紹介コーナーです。
- 名古屋図書館の使い方について知ろう！
名古屋図書館の施設や利用方法の紹介コーナーです。
- おすすめ本紹介
学生協働ボランティアの学生が紹介するおすすめ本のコーナーです。
- クリブニュース SS(ショートショート)募集企画
学生協働ボランティア企画で募集したショートショート作品の紹介コーナーです。

目次

♡中京大学生向け！名古屋図書館 館内マップ …	1
♡名古屋図書館の使い方について知ろう！ …	3
♡おすすめ本紹介 …	10
♡クリブニュース SS(ショートショート)募集企画 …	15
♡SNS 紹介・編集後記 …	24



「中京大生向け！名古屋図書館 館内マップ」

皆さんは、名古屋図書館を利用したことがありますか？ここでは、M2階が存在する少し特殊な階の区切りと、階ごとのルール、中京大学の学部人気の分類の場所を一部ご紹介します。

<名古屋図書館(NL) 館内図>

1F パソコン使用・充電〇

まず、入り口から入ったところが1階です。



心理学部 (分類番号:14*)

黄色の枠で囲ってあるところが、心理学部の学生に人気の心理学という分類のある書架です。

分類番号は「14」から始まります。

〇分類番号って何ですか？



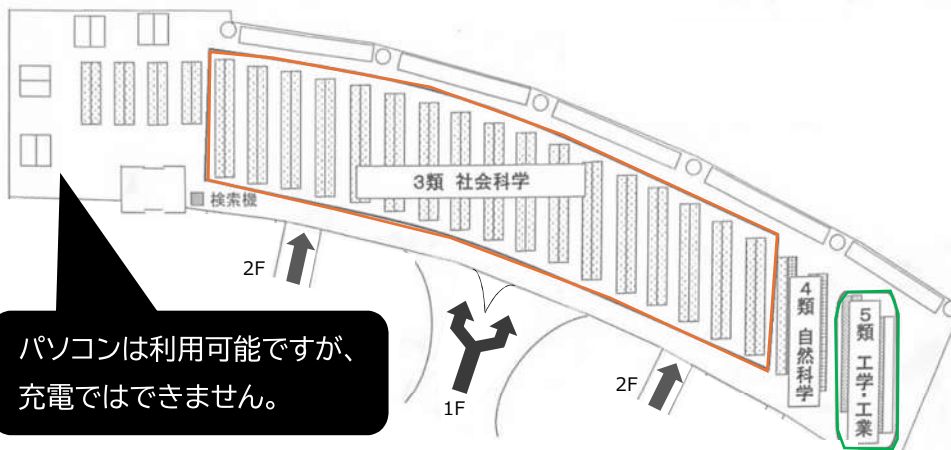
背表紙

← 分類番号は、本をジャンルごとに整理するための番号です。
本の背表紙に貼られたラベルに記載されており、本の内容を簡単に表しています。

<名古屋図書館(NL) 館内図>

M2F パソコン使用○・充電×

1階から、途中で二股に分かれた階段を上った先が M2階になります。



経済学部・経営学部 (分類番号:3**)

茶色の枠で囲ってあるところが、経済学部や経営学部の学生に人気の社会科学という分類の書架です。分類番号は「3」から始まります。

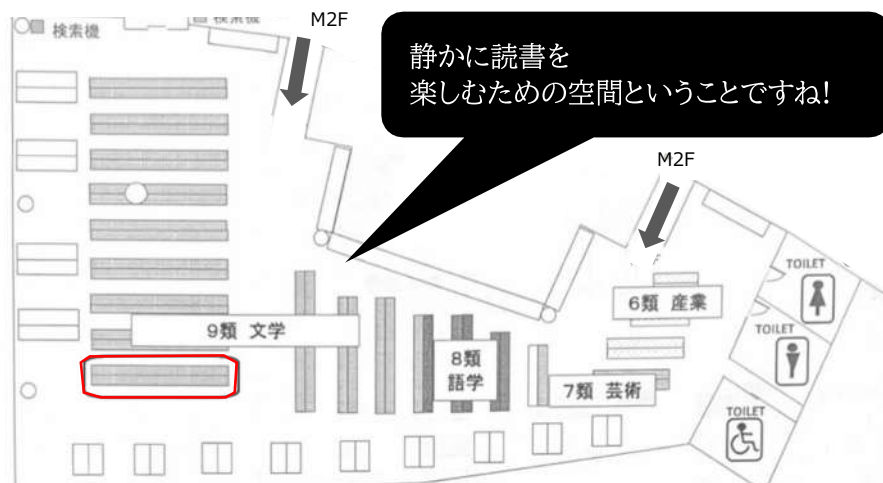
工学部 (分類番号:5**)

緑色の枠で囲ってあるところが、工学部の学生に人気の工学・工業という分類の書架です。分類番号は「5」から始まります。

2F 静粛エリア(音の出る機器×)

M2階から上に続く小さな階段(2か所)を上った場所が2階です。

ここは静粛エリアとなっており、パソコンや電卓など、操作の際に音が出てしまうものは使用禁止になっています。



文学部 (分類番号:91*)

赤色の枠で囲ってあるところが、文学部日本文学科の学生に人気の日本文学という分類の書架です。分類番号は「91」から始まります。

こちらのマップは利用者が本を直接手に取れる開架エリアのみですが、歴史文化学科の学生は、カウンターに申し出て、一般公開されていない閉架書庫を利用することも多いようです。

紹介しきれなかった分野の本もたくさんあるので、ぜひ実際に図書館を活用してみてください。

名古屋図書館の使い方について知ろう！

みなさんは、中京大学の名古屋図書館(NL)をどのように利用していますか？ また、どのように利用している方が多いと思いますか？

おそらく、本の貸出と答える人が多いのではないのでしょうか。

ここで、次の表を見てください。これは、2023 年度の NL の来館者数と入館者数に関するデータです。

入館者数(人)	貸出人数(人)	貸出冊数(冊)
148,276	9,013	16,795

貸出人数に対して、貸出冊数が多いですね！そして、入館者数はなんと、貸出人数の 10 倍以上！

このことから、本の貸出以外の目的で NL を利用している人が多いことが分かります。

というわけで今回は、特に名古屋キャンパスの学生向けに、本の貸出以外の NL の利用方法を詳しく紹介していきたいと思います！！

◆「シーン別！図書館の使い方」

このコーナーでは、様々なシチュエーションに関する図書館施設の利用方法を具体的に紹介します！

皆さんもお気に入りの使い方を見つけて、図書館を利用してみてはいかがでしょうか？

ケース① 借りたい本が決まっており、時間をかけずに借りたい！

→ 来館前に「OPAC」で貸出情報を検索しておくのがおすすめ！

「蔵書検索(OPAC)」から、資料の蔵書情報を検索できます！

本が所蔵されているか、借りられていないか、請求記号(本の分類)などを確認することができ、本を探す際の時短になります！また、貸出中の本の返却期限も確認可能です！

<オンライン蔵書目録(OPAC)のページの開き方>

中京大学の HP を次の順にアクセスしてください。

「Top ページ」→「図書館」→「蔵書検索(中京大学 OPAC)」

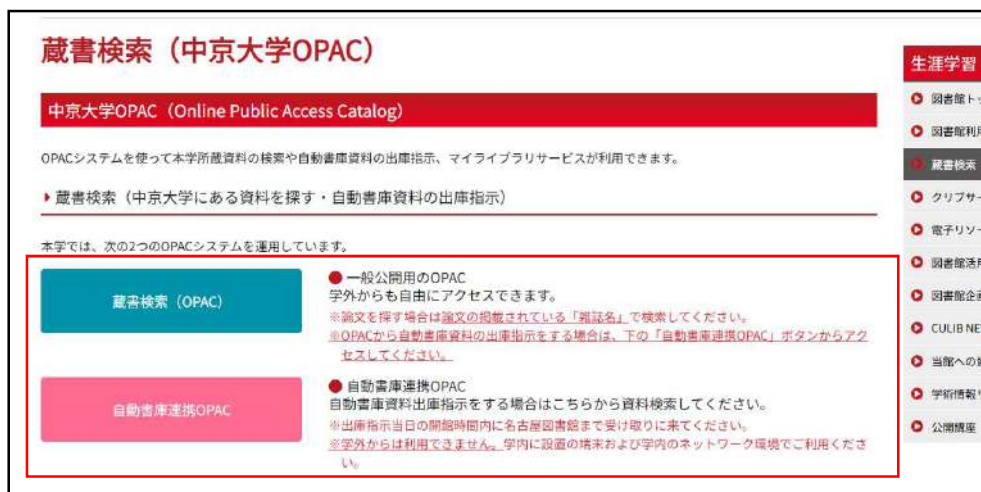
<中京大学ホームページ(Top ページ)上部>



<中京大学ホームページ(図書館)上部>



<中京大学ホームページ(蔵書検索(中京大学 OPAC))>



<借りたい資料の情報の調べ方>

(1) 中京大学 OPAC にアクセスします。

学外から利用可能な「一般公開用 OPAC」とオンライン上で自動書庫の出庫指示ができる「自動書庫連携 OPAC」のいずれかを選択してください。

<一般公開用 OPAC(学外からも利用可能)>
ブルーのボタン(ログイン不要)をクリック。



<自動書庫連携 OPAC>

名古屋図書館の自動書庫に入っている蔵書を利用するときは、ピンクのボタン(ログイン必要)をクリック。

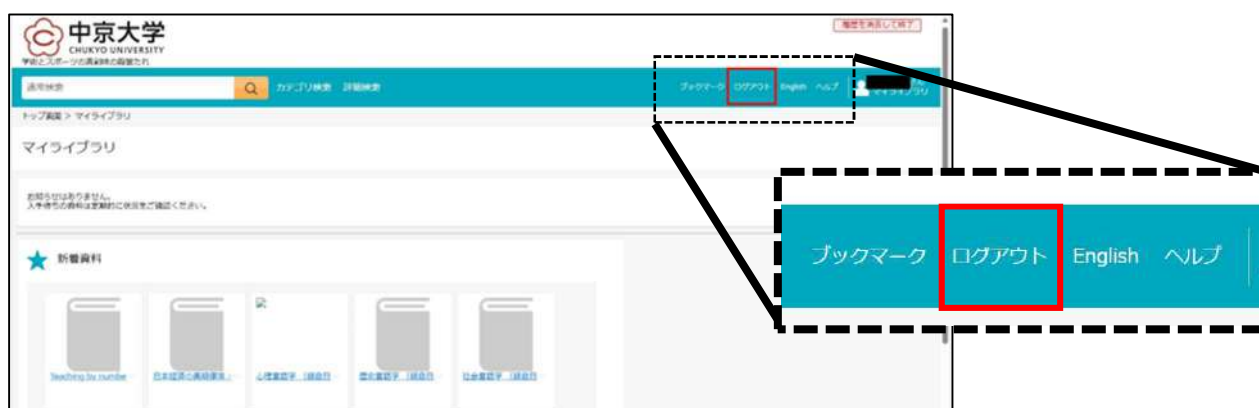


(2) 通常検索または詳細検索で調べたい本・資料を検索します。

蔵書の検索結果の見方については、次ページをご確認ください。



(3) 検索を終了するときは、ログアウトします。(ログインをした場合のみ)



<検索結果の見方>

OPAC で本を検索すると以下のような画面が表示され、本の情報を確認できます。

The screenshot shows the Chukyo University OPAC interface. At the top, there's a search bar with '星の王子さま' (The Little Prince) entered. Below the search bar, there's a navigation menu with 'トップ画面' (Home), '一覧画面' (List View), and '詳細画面' (Detail View). The main content area displays the book's title, author, and a table of holdings. A blue box highlights the '予約' (Reserve) and '登録' (Bookmark) buttons, with a text overlay stating: 'このボタンを押すと 本の登録(ブックマーク)や予約が可能です! (要ログイン)' (Pressing this button allows you to register (bookmark) or reserve the book! (Login required)). Below the table, there's a '詳細情報' (Detailed Information) section with fields for '刊年' (Publication Year), '形態' (Form), '並列書名' (Parallel Title), '別書名' (Alternative Title), 'シリーズ名' (Series Name), and '注記' (Notes).

No.	予約人数	期年	所在	請求記号	資料ID	備考	貸出区分	状況
1	0		名古屋 2F 開架	837.7 Sa 22	1186653		貸出可	

予約 登録 自次

詳細情報

刊年 2012
形態 223p : 挿図 : 21cm
並列書名 The little prince
別書名 英語で読む星の王子さま
英語で読む星の王子さま : The little prince
シリーズ名 IBC対訳ライブラリー
注記 付随資料: CD-ROM (1枚 : 12cm)

○所在: 資料が保管されている場所

- ・「○○(図書館名)開架」の場合

所在に記された場所に行き、請求記号を手掛かりに資料を探してください。

- ・「○○(図書館名)閉架」の場合

所蔵館のカウンターに資料請求票を提出して資料の取出しを依頼してください。

手続きを行えば閉架書庫に入室も可能です。

○請求記号: 図書の背ラベルに表示されている記号

本を探すときに使います!

○資料 ID

図書館の本は、資料 ID(数字)で管理されているため、特定の本を探すときに使います!

○貸出区分

借りられるかどうか分かります!

- ・貸出可+状況が空欄=貸出可
- ・貸出可+貸出中=予約ボタンから予約可
- ・貸出禁止+空欄=館内閲覧のみ

○状況

空欄の場合は、館外貸出されていない状態ですので、本棚を確認してみましょう!

※記載事項があればカウンターへお尋ねください。

ケース② 完全個室で落ち着いて作業がしたい！
→個人学習室がおすすめ！

要手続き(予約可)。
カウンターでの手続きをお願いします！
※2部屋あります。
※利用時間
→2時間。次の予約がなければ延長可能！
※PCの音出しや声出しは不可。
※部屋のサイズや家具に違いはありません！

<個人学習室(入口)>



<個人学習室(室内)>



ケース③ 発表の練習やグループワーク、資料作成がしたい！
→ラーニング・スクエアがおすすめ！

ラーニング・スクエアには、グループ席と個人席があり、
目的に合わせた利用が可能です！
なんと予約が不要！気軽に利用が可能です！

<ラーニング・スクエア>



<グループ席>



プロジェクターやホワイトボードを使用した発表の練習ができます。
グループワークや資料作成の相談にも◎。
教え合いながらの試験勉強にも使用されているそうです！
4年生の皆さんは、就活のため、複数人で面接の練習をするために使うのもアリですね！

<個人席>



個人の学習に使えます！
オンライン授業の受講も可能！（イヤホン等の使用は必須）
☆ポイント☆
近くにラーニングアドバイザーの方がいるので、
レポート作成や就活等の相談が可能！

ケース④ 大人数で作業がしたい！
→グループ学習室がおすすめ！

要手続き(予約可)。
カウンターでの手続きをお願いします！

<グループ学習室入口付近>



<グループ学習室1>



利用人数

→なんと 10～40 名！！

利用時間

→1回2時間まで。次の予約がなければ延長可能！

グループワーク、発表練習、面接練習等、使い方はいろいろ！

<グループ学習室2>



利用人数

→2～15 名

利用時間

→開講期 9:00～13:00 と休講期は要手続き(予約可)。

→開講期 13:00 以降は予約不要+制限時間なし！

ケース⑤ 図書館の作業で疲れたから休憩したい…
→リフレッシュ・スクエアがおすすめ！

飲食物を持ち込んで利用可能な開放的な空間！

※マナー遵守。

密閉可能な容器の飲み物のみ OK。汁物 NG など。

※予約不要！

<Sky Refresh Square>

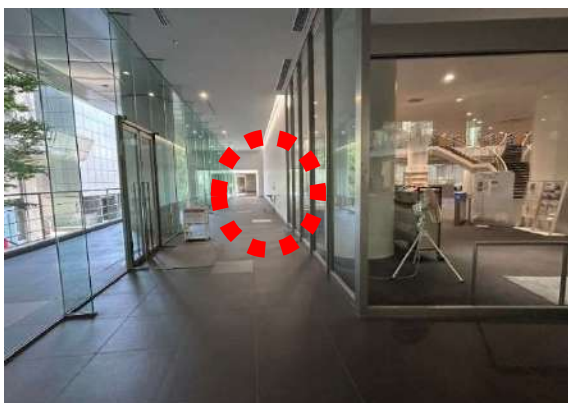


◆ 知っトク！

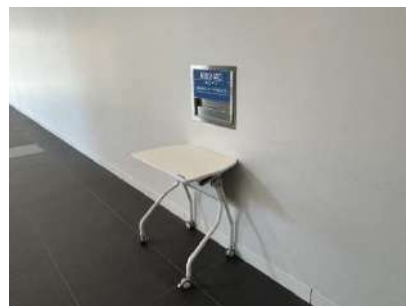
このコーナーでは、知っている図書館をより快適に利用できる情報を紹介します！

(1)返却ポスト

NL の返却ポストの存在をご存じでしょうか？
なんと閉館時間中に本を返却できます！
便利なのでぜひご利用ください！



< 返却ポスト >



場所は NL の入り口のすぐそばです！
廊下を進んでいくと右手に見えてきます！

(2)レファレンスサービス

図書館の受付カウンターのひとつにレファレンスカウンターがあるのをご存知でしょうか？

このカウンターでは、司書さんに調べものの相談をすることが可能です！

でも実際、どんな質問をしていいのかわからない…

そんな人のために、過去にどんな質問があったか司書さんに聞いてきました！

個人情報なので相談内容を要約すると…。

『文献や資料を探してほしい』、『この情報が欲しい』、『このテーマについて調べたい』など。

レポートを作成する際に難しいテーマにぶつかり、どう調べたらいいかわからない学生や、とても古い情報が必要となり、資料の探し方を相談している学生が多い、という印象でした。

また、図書館内の本だけでなく、PC を使って情報を探し、場合によっては外部の図書館から本を取り寄せてくださるそうです。

本の取り寄せには時間がかかることが多いので、なるべく早めに相談すると、より有力な情報が確実に手に入るかもしれませんね！

おすすめ本紹介

学生協働スタッフがおすすめしたいと思う本を4作品紹介！

すべて中京大学図書館で借りることができるので、気になったものがあれば、読んでみてください！

1. 羊と鋼の森／宮下奈都（著）
2. 死神の精度／伊坂幸太郎（著）
3. 午後のチャイムが鳴るまでは／阿津川辰海（著）
4. モンテ・クリスト伯／アレクサンドル・デュマ（著）



羊と鋼の森

『森の匂いがした。秋の、夜に近い時間の森。風が木々を揺らし、ざわざわと葉の鳴る音がする。夜になりかける時間の、森の匂い。』

「ピアノの調律」の世界へようこそ。

このお話は、新人の調律師である外村が、苦難にくじけそうになりながらも理想の音を追い求めるお話です。どんなに
もがき苦しくても、求めてしまう。この本は、そんな人間の渇きを痛いほどに感じる事が出来ます。

外村を夢中にさせたピアノの音を、文字で生き生きと表現する作者の語彙力と表現力にも注目です。

書 誌 情 報

タ イ ト ル: 羊と鋼の森

著 者: 宮下奈都

出 版 社: 文藝春秋

出 版 年: 2015 年 9 月

N D C: 913.6

I S B N: 9784163902944

所 蔵 館: NL(名古屋図書館)2F 開架、 TL(豊田図書館)3F 開架



『死神の精度』

この作品は、1週間対象の人間を調査し、その人間の死について、可否の判断をする死神（主人公）の視点を通して、それぞれ違う個性を持った6人の人物の人生が語られる小説です。

1つ1つの話が短くてユーモアもあり、読みやすく、不思議と物語の先が気になってページをめくってしまうような文章なので、すぐに物語に引き込まれてしまいます。

この作品の魅力は、主人公が人間でないからか、「死」について取り扱っているのに重くなりすぎずに新鮮な気持ちですらすら読めるところです。また、主人公が冷静で真面目な性格をしています。人とのやり取りで少しずれた返答をしているところにクスリとさせられます。

雨の日にゆっくりと本を読んで、その世界に引き込まれたいと考える人におすすめの作品です。

書誌情報

タイトル:死神の精度

著者:伊坂幸太郎

N D C:913.6

出版社:文芸春秋

I S B N:4163239804

出版年:2005年6月

所蔵館:NL(名古屋図書館)2F開架



『午後のチャイムが鳴るまでは』

高校生たちのある日の65分間の昼休みを描いた、ミステリ短編集。

校外にラーメンを食べに行く2人、締め切り迫る部誌の入稿、校則の抜け穴をつく消しゴムポーカー、謎の独り言の推理、17年越しに明らかになる七不思議の真実。

わかりやすい内容がわかりやすい文体で書かれているため、普段読書をしない人でも気軽に読める小説です。

ですが、伏線が各所に張り巡らされているので、最終章には満足のできる作品になっています。章ごとに登場するキャラクターが繋がっていることもこの本の面白さの一つです。

高校生の青春を忘れたくない！思い出したい！という方にもおすすめの一冊です。

馬鹿らしいことに全力で打ち込む彼らに引き込まれ、応援したくなることでしょう！

書 誌 情 報

タイトル: 午後のチャイムが鳴るまでは

著 者: 阿津川辰海

N D C: 913.6

出 版 社: 実業之日本社

I S B N: 9784408538440

出 版 年: 2023 年9月

所 蔵 館: NL(名古屋図書館)2F 開架

『モンテ・クリスト伯』

この本を一言で表すなら、「復讐譚」です。

無実の罪で投獄され、地獄のような日々を過ごす主人公『エドモン・ダンテス』でしたが、獄中での出会いを機に脱獄。そこから、彼の復讐は始まります。

この物語の魅力的な点は、主人公の人間らしさにあります。復讐を淡々と理知的にこなしているように見えますが、その実、愛した人の懇願に揺れ動いたり、復讐により破滅した人間を見て自身が与えた罰の重さに苦悩したりといった弱さや愛が描かれています。緻密に練られたストーリーや複雑な人間関係、渦巻く様々な思惑や感情など、ただの復讐譚で終わらない魅力があります。

少し長いですが、ページをめくるたびにこれからの展開にわくわくする、読み始めると止まらない作品です。

人間関係を描いた小説を読むのが好きな方にはもちろん、復讐譚という題材にとっつきにくさを感じている方にもぜひ読んでみていただきたい、お勧めの1冊です。

書誌情報

タイトル:モンテ・クリスト伯

著者:アレクサンドル・デュマ(著) 山内義雄(訳)

出版社:新潮社

出版年:1927年10月

N D C:908/Se 22/15

所蔵館:NL (名古屋図書館)GF 閉架

クリブニュースSS(ショートショート)募集企画



本企画にご応募いただいたみなさまへ

今回の企画にご応募いただきましてありがとうございます。
ご応募いただいた作品を審査員の文学部の先生方にお見せし、コメントをいただきました。
審査にご協力いただきました先生方にも、心からお礼申し上げます。

・テーマ部門

テーマに沿った4000字以内の作品を募集した部門です。
テーマ:「大学」

・自由部門

自由なテーマで4000字以内の作品を募集した部門です。

テーマ部門最優秀作品

『ありふれた図書館での出来事』
作者: inori

テーマ部門優秀作品

『光に染めて』
作者: 梱包材

自由部門最優秀作品

『無味な世界に彩を』
作者: 悠奈

『ありふれた図書館での出来事』

inori

急がなければ。時刻はすでに20時を過ぎたところで、図書館に残る人も
少なくなりつつある。実験レポートの提出期限は明日の正午である。

では家に帰ってレポートを書いてもいいのではと思われるかもしれないが、大
学から帰宅した後、レポートを書き上げることが不可能なことは今までのレ
ポート作成における失敗経験がよい証拠である。結局は夜の12時を過ぎた
あたりから作業を始め、なんとか日が昇ってくるころに誤字脱字だらけで内
容ボロボロの6000字ほどの文章ファイルが出来上がるだけである。

とてもこれはレポートなどと呼べる代物ではない。つまるところ、何としても
図書館が閉まる22時までにレポートを書き上げて気持ち良く帰宅するほ
かないのである。

ここで私の正面に向かう席に同じく工学部の学生と思われる人物が座って
いる。私よりも後に来た学生だがその学生も私と同様、何冊かの参考文献を
机の角に置きノートPCと格闘している。この曜日、この時間に図書館にお
り、かつ参考書のタイトルには「電磁気学」の文字、間違いない。

私と同様にこの時間までレポートを仕上げようとしているということだ。そ
う思うと少し気が楽になった。私だけではない。私と同様にこの夜遅くまで、
閑散とした図書館に残りレポートを仕上げようとしている仲間がいる。実験
レポートの提出遅れは実験科目の単位が即座になくなることを意味する。
他の教養科目のレポートとは文章量も、内容も、そして重みも全くの別物で
ある。そのつらさをおそらく同様に味わっている仲間が頑張っているのわか
ら、自分も頑張ろう。名前も知らない方だがありがとう、まだ頑張れる気が
するよ。

21時を少し過ぎたところで、やっと書き終わった。最後に慎重に見直しを
して誤字脱字がないかをチェックする。

このようなケアレスミスでレポートの評価点が落ちるのはあまりにも割に合
わない。少しの時間を使えば無くせるミスは排除しよう心掛けるといっ
ことも、過去の失敗からの教訓である。参考文献をもとあった棚の場所に返却
し、帰り支度をする。そういえば集中して気付かなかったが前の学生は
まだPCを眺め続けている。すまない、私は先に帰宅するよ。そう心の中で
言い残してその場をあとにしようとしたその時だ。ふと彼のPC画面が目
に入った。そこにあったのは私の見慣れたWordPressの青と白の画面ではなく
赤々としたNetfixのホーム画面であった。

もちろん勉強するだけが図書館ではない。どのように使おうが本人の自由
である。そう、私が勝手に自分で目の前の学生にはしごをかけ、勝手に外さ
れただけである。その日、なんとも言えない気持ちで私は大学の図書館を後
にした。

主人公が、たまたま居合わせた学生に同族意識を勝手に感じて、レポー
ト作成を進めていく設定はおもしろいが、落ちに工夫が欲しかった。

中川先生

エッセイ的な作品。

前段の文章にやや冗長な感がありますが、学生生活の経験則にリアリ
ティがあります。連帯感が失望に切り替わる落差の描き方、そしてもう1
人の「仲間」はきつと作者の「失敗体験」みたいなことになるんだろうな、な
ど、ごく短い分量の中に大学生の日常の「コマ」が等身大で書かれていて、共
感とともに微笑ましく、にやりとしました。

宮内先生

3点の応募作品のうちで、最もショートショートらしい作品と思いました。
ただし、どんどん返し弱く、上々の出来とは言えません。例えば、前の学
生「PC画面」がネットフリなどなく、異世界の画面だった。そこで、「えっ」と周りを見たら大学生仲間と思っていた人々が一斉に唇だけしか
ない顔を上げてニヤツと笑うとか。

唯一「オチ」(＝どんどん返し)のある作品であり、「最もショートショート
らしい」とした理由なのですが、その肝心の「オチ」が平凡(＝誰でも経験し
そう／思いつきそう)なのが残念です。

酒井先生

『光に染めて』 梱包材

『B館5階の一番奥の部屋には女性の幽霊が出る』

うちの大学に通う人なら知っている有名な噂だ。このB館は使われることが少ないので、こんなホラーな噂が広まっているのだろう。

そんな日くつきの部屋に僕は来ている。と言っても、別に僕はホラーが好きじゃない。

ここに来れば新たな発想が得られるかもしれないと思ったからだ。

僕は中学の時から絵を描いている。昔は賞をもらったこともあったが、今は納得のいく絵を描くことが出来ず、美術サークルも休みがちになっている。

『行き詰ってるなら、色んな経験をしてみるといいぞ』

そんな悩みを抱えたまま、先日美術サークルに顔を出したときに先輩からアドバイスをもたらした。そのアドバイス通りに近くの観光地に足を運んだり、スポーツ観戦をしたりしたが結局スランプを脱することは出来なかった。

これからどうするかと考えていた時に件の噂について思い出した。もしも噂が本当で幽霊がいるのだとしたら、それはいい経験になるのではないだろうか。

「いいが」

B館5階の一番奥の部屋の前に着く。時刻は午後4時半で少し日が傾いてきたくらいだ。なんとなく廊下が暗くなっており、それらしい雰囲気が出ている。

扉を開けて中に入る。中のカーテンは開いており、電気はついていないが廊下よりは明るかった。部屋の構造は少し小さめの講義室という感じで、あまり使われていないと聞いていたが、とても綺麗だった。

教室中を見回してみるが、それらしい存在は見当たらない。次に教室の中央を一周してみた。しかし、人影はおろか物音すら聞こえてこない。やはり噂は噂ということか。

「また別のやつを考えるか——」

「こんなところで何してるの？」

そう思った時、急に後ろから誰かに話しかけられた。唐突に話しかけられたので驚いて振り返ると、そこには栗色の髪をした肌の白い女の子が立っていた。

「何もしてない。ちょっと考え事をしてただけ」

「ふうん、私みたいに幽霊見たさに来た人かと思っただけで違ってたんだ。ぎーんねん」

「勝手に期待して勝手に残念そうにするなよ」

「あははははーいいね、ナイスツッコミ！」

今のどこに笑う要素があったのだろうか。別にツッコンだ訳ではないし思ったことを口にしただけなのに。笑いのツボが特殊なのだろうか。

「あー、笑った笑った。ねえ、あなた何年生？名前は何？」

「そういうのは名乗ってから聞くもんじゃないのか」

「もう、しょうがないな。私は中村優乃（ゆうの）。一年生だよ」

こいつ、同じ一年かよ。よく先輩の可能性がある僕にナイスツッコミとか言えるな。ちょっと距離感バグってないか？

「ほら、私は名乗ったよ？あなたは？」

「僕は京嶋余鷹（よだか）。同じく一年だ」

「あー、やっぱり同じ一年だ。よろしくね、余鷹君！」

「やっぱりってどういうことだ？」

「それはね……私の勘？」

「聞いた僕が馬鹿だった」

「なんで！？」

これがちよつと騒がしくてどこことなくウザい感じがする同級生。中村優乃との出会いだった。



「いやあ、人がいない海はいもんだね」
「もうすぐ11月だしな。来るほうが珍しいだろ」

夏はとつくに終わり、肌寒くなってきた今日この頃。海に来る人なんて釣り人くらいしかいないだろう。

「はい、二人とも。飲み物買ってきたよ」
「あ、ありがとうございます。中村先生」

今日は車で一時間半かかる場所にある海に来ている。当然自分から来ようとしたわけではなく、優乃に誘われたから来ただけだ。ちなみにここまで連れてきてくれたのは、この前優乃を迎えに来た中村先生だ。名字から分かる通り、優乃の親戚らしい。大学の中では見たことがないから、違う学部 of 教授なのだろう。

中村先生から貰ったコーヒーを飲みながら海を眺める。海は何度か絵に描いたこともあり、新しい何かを得られるかと言えはそうでもない。もっと真新しい何かが欲しいところだ。
「ねえ、海楽しい？」

唐突に優乃が聞いてくる。

「楽しいかどうか聞かれると微妙だな。ただ眺めてるだけだと面白いとは思わない」

「そう？こうして見てるだけでも心が晴れる気がしない？」

「まあ、そう言いたい気持ちには分かるけど……」

「何か悩んでるでしょ？」

驚いた。まさか悩みがあることを言い当てられるとは。僕はあまり顔に出ないタイプだと思っていたのだが、暗い顔でもしてしまっていたのかもしれない。

「よく分かったな」

「私、そういうの結構気づいちゃうタイプなんだよ」

そう言っただけで優乃は陽射しの効果もあって眩しく見えた。いや、9割くらい陽の光が眩しいだけだな。きつとそうだ。

「意外と」の間違いじゃないか？」

「なんでそういうこと言うのー？」

「ありがとな。でも、もう大丈夫だ」

「そうなの？まあ、余鷹君がそう言うならいいんだけど」

芸術における天才の言葉で、ふと頭の中にイメージが湧いてきたというのがある。今まではその意味を理解できなかったけど、たった今分かった。

今日は学園祭だ。普段も人が多い気がするが、より一層人の数が多くなっている気がする。

今日は優乃とこの学園祭を一緒に周る約束をしている。思えばここ最近ずっと優乃と何かしている気がするな。

12時にB館前で待ち合わせをしており、15分前から待っている。だが、一向に優乃が姿を現す気配がない。スマホを見てもメッセージすら届いていない。

「時間を間違えたか？」

もう一度メッセージを確認するが、日にちも時間も間違っていない。寝坊でもしたか？それで急いでここに向かってメッセージを送ることすら忘れていたとか。まあ、優乃ならありそう。

その時、スマホがブルブルと震えた。画面を見ると、優乃の携帯からの着信だった。ようやく連絡が来たか。

「もしもし。寝坊でもしたのか？連絡ならもう少し早めに——」

『もしもし。京嶋君。私は中村だ。出来れば君に今から言う場所にきてほしい。大事な話があるんだ』



中村先生が指定したのはここ近辺で一番大きな病院だった。ロビーに行く
と中村先生が僕のことを待っていた。白衣を身に纏って。

「先生って医者の方の先生だったんですね」
「勘違いしていることには気づいていたけど、訂正する必要もないと思ったか
らね」

中村先生の後ろを歩きながら病院の廊下を進む。

「ここだよ」

案内された場所は一つの病室だった。促されて中に入ると、そこにはベッド
の上で本を読んでいる優乃がいた。扉が開いたことに気づくと、顔を上げて
こちらを確認する。

「あ、余鷹君！」

笑顔で手を振る優乃。しかし、その笑みは前に見た顔とは違い、どこか暗さ
が見えた。

「……………何があったんだ？」

色々考えた上で発した言葉は自分でも分かるくらいに震えていた。それだ
け僕にとって衝撃的な出来事だったのだ。

「今まで黙っててごめんね。実は私、余鷹君と出会った時には病気になってた
んだ。内臓の病気で今すぐどうこうって訳じゃなかったんだけど、ちよつと難
しい手術をしなくちゃいけないみたいで……。だから、手術をする前に一週
間だけ時間をもらったの。気分が晴れるようにって。その時に余鷹君と出
会ったんだ」

「なんで大学のあの教室にいたんだ？」

「大学は全然行けてなかったから行きたかったっていうのと、もしも幽霊を見
れたらこれから何かあっても怖くないかなって——」

「馬鹿なこと言ってるじゃねえよ！」

今までずっと明るかった優乃から出た弱気な言葉。人の悩みには気づいて
声を掛けるくせに、自分の悩みや不安は抱え込んで押しつぶして。

別にそれが悪いとは言わない。だけど、僕はそれが良いなんて全く思わない。

「怖かったら誰かに怖いって言えばいいだろ！泣きたくなったら誰かの胸で
枯れるまで泣けばいいだろ——」

僕は優乃に必死に伝える。この一週間は僕にとって新鮮で過激で鮮烈なも
のとなった。おかげで絵のイメージも固まった。あとは筆に起こすだけだ。そ
れを叶えてくれたのは全部優乃のおかげ。そんな彼女が立ち止まって悩んで
怖がっているのを黙って見ているなんて出来ない。

「一人で抱え込むなよ……………。遊びの誘いは出来るくせに弱音を吐くことは
出来ないのか？」

優乃の目に涙が浮かぶ。そして、彼女は声を上げて泣いた。今までの想いを
吐きだしながら。「ごめんね、服濡らしちゃって……………」

どこか恥ずかしそうに謝る優乃。顔も赤くなっているが、先ほどまでの暗さ
は消えている。やはり優乃にはこっこの顔の方が何倍も似合っている。

「優乃、約束をしよう」

「約束？」

「ああ、僕は今度絵のコンクールに応募しようと思ってるんだ」

案内だけは貰っていた三か月後に開催されるという絵画コンクール。この前
降りてきたアイデアを絵にしておこのコンクールに応募するつもりだ。

「僕はそのコンクールで賞を取るために頑張る。だから、優乃も手術を頑張れ。
お互いに励まし合って努力し合おう」

僕は優乃に向けて拳を差し出す。

「手術は別に私が頑張るわけじゃないんだけどね」

優乃は苦笑しながら拳をぶつける。そうして、
僕らは約束を果たすために互いに頑張ることを誓った。



三か月後。

県立の総合会館。ここに今回のコンクールで賞を取った作品が飾られている。

「よう、京嶋。そんなボーっとしてどうしたんだ？」

「あ、先輩。お疲れ様です」

作品を見ていると、先輩に声を掛けられる。

「つて、なんだ。自分の作品を見たのかよ」

「いいじゃないですか。久しぶりに賞が取れて嬉しかったんですよ」

「ま、悩みも解決したみたいで何よりだ」

「その節はありがとうございます」

先輩と話していると、スマホの通知が鳴った。通知を確認した僕は溜息を吐く。

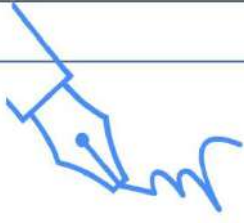
「どうした？」

「ちょっと知り合いが道に迷ってるみたいなんで迎えに行つてきます」

「そうか。気をつけてな」

先輩に別れを告げて、呼ばれた場所まで向かう。ちよつと面倒だけど誘ったのは僕だから仕方ない。“約束”だからな。

『第62回梅木絵画コンクール最優秀賞『光に染めて』京嶋余鷹』



優乃に対する余鷹の微妙な心情の変化が描かれている点を評価しました。

中川先生

自分の殻を破ろうとする主人公の男子と天真爛漫な女子というかわいらしいボーイミーツガールで、ストレートなハッピーエンドには好感が持てます。が、設定が少し安直であるのと、導入の「幽霊」という道具立てをもう少し活かしてほしかったように感じます。また、海の場面での作品へのインスピレーションがおとずれた瞬間をもっと鮮烈な形で描けていたら良かったのでは、と思います。

宮内先生

短編小説としてみれば、後味もよく、きちんとまとまっていると思います。ただし、ショートショートに必要な「オチ」がなく、よい評価を与えられません。

例えば、1枚目の「教室中を見回して見るが、」以下をちよつと書き換えるだけで表現効果は高まります。改行せずに「また別のやつを考えるか」「そう思ったとき」と続け、そこで1行空けて「こんなところで何してるの？」（改行・酒井注）後ろから話しかけられた。「のように優乃のセリフ以下を続ければ、行空けの多い作品という特徴も活かせ、「急に」「誰かに」などの説明的な表現を使わずに状況を描けます。

こんな風に、冗語を削ってシャープな表現に絞り込んで、短篇小説として完成度を高めて欲しいと思います。

酒井先生



『無味な世界に彩を』 いろいろ

悠奈
ゆな

「ねえ風ちゃん。あなたの言葉で、私を舞台に立たせてよ」

なぎ
やまかわ

それが彼女——大原雫の第一声だった。

ふわふわの髪を編んだ二本のお下げが揺れている。彼女は、その演技力でこの高校の演劇部を全国大会まで導いた立役者。つまりちよつとした学校の有名人だ。可愛らしい容姿も、彼女の名声に拍車をかけている。

対して私は、文芸部の一部員。容姿も勉強も、部活の実績すら平々凡々な私にとって、彼女は雲の上の存在だ。

そんな彼女が、満面の笑みを浮かべて右手を差し出している。

やまかわ

「あれ、山川風ちゃんだよね？ 違った？」

「あ、合ってます」

学校の有名人を前に、思わず敬語になってしまう。

「よかった。私、演劇部の大原雫です！ 今日風ちゃんにお願いがしたくて来たんだ」

存じていますとか、どうして私のことを知っているんですかとか、言いにくいことはたくさんあるけれど、まったく頭が働かない。そうしている間にも、大原さんは笑顔で話を続ける。

「今年の文化祭なんだけど、いつもとちよつと違うことをやってみたいと思ってる。それでね、文芸部とコラボしてみないかって話になったの」

どう？ と、確かめるような視線を送られる。私はそれに答えられずに、大原さんの隣にいる部長に視線を送った。

わが文芸部の部長は、演劇部と兼部していて、大原さんのこともよく知っているはずだ。その部長が、顔の前で手を合わせている。

「べつに私は構わないけど……。どうして私にその話を持ってくるんですか？」

「脚本、風ちゃんに書いてほしいから」

思わず「は？」と声が出た。部長は、私の反応を予想していたかのように苦笑いしている。

「あの、それってどういう——」

状況がわからないまま、昼休み終了の鐘が鳴り響く。

「というわけをお願いね！ これ、詳細——」
私の意見をまったく聞かず、大原さんは私に花柄のメモを押しつけた。

*

私は昔から、器用でなんでもできた。勉強、運動、音楽、美術。大体どれも、「上の下」くらいの成績だった。

そんな私が、唯一苦手なことが感情表現。そのせいか、どの部門でも一番にはなれない。

でも、だからといって悔しくはない。自を表現することへの憧れはあっても、それだけだった。

文芸部へは、高校の方針が「全校生徒の部活動所属」だったから、なんとなく入部した。

適当な言葉を並べて無味な世界を創造する。その繰り返し。楽しいかと聞かれたら、よくわからない。

そんな私に、大原雫はなぜか白羽の矢を立てた。

「……できた」

頭を抱えながら、一週間で脚本を完成させた。

内容は、舞台映えしそうな「救い」の話。大原さんをイメージした感情豊かな少女が、悩みを持つ誰かを救っていく、ありきたりな話。

今日は大原さんに見せるために、完成したばかりの原稿を持って登校した。

「うーん、微妙」

その大原さんは、複雑そうに笑いながらこう言った。

「どこが微妙だった？」

別に腹を立てたわけではない。完璧でなかった自分の物語に対する追及だ。幸い、大原さんは私のきつい言い方を気に留めなかったらしい。

「うーん。なんて言ったらいいんだろう。えーっと……」
随分時間をかけて出てきたのは、こんな言葉だった。

「風ちゃんの世界って、そんなものの？」

「え？」

抽象的すぎる言葉に困惑した。本人も、頼杖をついて考えこんでしまった。
「うーん……。言葉で説明するの苦手なんだよなあ……」

大原さんは台本を持って立ち上がる。そして、今見たばかりの台詞をすらすら唱え始めた。

『この世界はこんなに綺麗なもので溢れているのに、どうしてあなたたちはそれに気づかないの？』……うーん、なんか違うな」

さすがの演技力だ。でも、彼女の言う通り、なにか違う。なにが違うのかは、よくわからない。大原さんのイメージに合わせたのにどうしてだろう？

私が眉間に皺を寄せていたからだろうか。

大原さんは、演技をやめて、人懐っこい笑みを浮かべた。

「私ね、風ちゃんの物語、好きなんだ」

「へ？」

突然の告白に困惑する。この子の言動は、いつも抽象的で突発的だ。

「この前、部誌をもらったから、全部読んでみたの。皆、自分の世界を表現できている、いいと思ったよ。でも、風ちゃんの物語が一番好きだと思った」

学校中の有名人、それも演技で名を馳せた彼女にそう評されるのは、きつと嬉しいことなのだろう。でも納得できなかった。

だって私は、ありきたりな世界を、ありきたりな方法で創造してるだけだから。

それでも大原さんは、ふわりと笑う。

「風ちゃんの言葉、とっても綺麗なんだよ。一つひとつが丁寧で、すごく勉強してるなことが伝わってくる」

「でも、それだけじゃない？ ありきたりなことを適当に並べてるだけの、無味な言葉なのに」

自分の嫌なところが顔を出す。完璧主義で手が抜けないくせに、褒められると否定したくなる。

大原さんは一瞬きよんとしたけど、すぐに笑った。まるで私に期待しているかのように。

「そんなことないよ。風ちゃんの世界は確かに単調かもしれないけど、なににもないわけじゃない。よく読んでみると、風ちゃんのメッセージがちゃんと伝わってくるもん」

大原さんは私に右手を差し出した。

「そんな世界に、私の演技で彩を与えられたら最高じゃない？」

「……………」

私は思わずその手を取った。初めて会った日に取れなかった手を、取ってしまった。

大原さんがへらりと笑うので、慌てて弁解する。

「いいいと思うけど、どうしたらいいかわからなくて……………」

「そうだよねえ。私もよくわかんない」

ふにやふにやと情けない顔になっていく。

二人で首をかしげていると、不意に大原さんが「そうだー」と叫んだ。「見てみたいいいんだよ！これが風ちゃんの世界なんだーって！」

大原さんはそのまま、歌うように言葉を紡ぐ。

即興劇かと思ったら違った。台詞に覚えがある。これは、私が初めて創り上げた物語だ。

私が書いたものとは思えないほど大げさな表現。私の世界のはずなのに、感情がこれでもかと伝わってくる。

そこには確かに、「色」があった。

*

「脚本、書き直してきた」

「はやーい！どこ直してくれたの？」

「全部」

「全部?！」

大原さんが目を飛び出さんばかりに驚いている。三日で書き直した脚本を、大原さんに押しつける。

原稿を受け取った大原さんは、にこにこしながら読んでいる。読んでいる間も、表情がころころ変わる。大原さんらしい。

ありきたりで、結末が予想できる物語。今の私には、それが精一杯。それでも、彼女が彩りたいと思った「世界」は、確かに私の「救い」だった。

一万字強の脚本を読み終わり、大原さんはまくしたてた。

「すごい！綺麗！やってみたい！最高！」

「う、うん……………」

語彙力のない感想に気圧されてしまう。楽しんでもらえたようになによりだけ。

「ごめんね。大原さんのイメージからかけ離れちゃって」

「いいのいいの。それは私の腕の見せ所だよ」

大原さんはケラケラと笑う。

「ふふ。楽しみだなあ」

*

「……………うん。そうだね」

つられて私も笑ってしまった。

『(い)はどい?』

真つ暗な世界を、少女——大原雫が歩いている。
大原さんが創り上げる世界は、文字通り無色だった。舞台上を歩くその姿は、感情を微塵も伝えてこない。

私は客席から、大原さんが描く世界を見守っていた。

この演目は、テーマは同じでも、当初はまったく違うものだった。大原さんの、大輪の花のイメージで作った最初の脚本も、決して悪いものではなかった。でも、それが伝えられたのは大原さんの明るさだけだった。

大原さんの演技を見て思いついたのは、その明るさを完全に消してしまうこと。無味な私の世界を、精一杯味気なく描いてもらうこと。彼女は笑った。
「こんな演技、したことない」と。

あるとき少女は、道端に咲くアマリリスを手にとった。ここで初めて、彼女は表情を変える。

『……綺麗』

少女は次に、人に会った。でも、花を見て綺麗と思う心はあっても人への感情はない少女は、どう関わっていいか知らない。

少女は黄色のバラを手にとった。「友情」を知った。マリーゴールドを手にとった。「信頼」を知った。少女は人と、関わることを知った。やがてカーネーションを手にした少女は、愛を送る相手を見つけた。少女は様々な花に触れ、その言葉と色を、どんどん吸収していった。

だけど同時に、知りたくないことまで知ってしまった。アネモネ。「恋の苦しみ」。

失恋し、人を信じられなくなった少女は、月桂樹が咲き乱れる中を、とぼとぼと歩いていく。

歩いて歩いて、歩いた先に、花は咲いていなかった。

少女は自分が歩いてきた道を振り返る。

『どうしよう。せつかく手に入れたものを、すべて捨ててしまった』

少女は初めて、花に頼らずに「絶望」を知った。

『だけでも、元には戻れない。戻りたくない』

次の瞬間、舞台が煌々と照らされた。

私の無味な言葉では表現しきれない世界が、そこにはあった。

『あっちにはバラ! こっちにはカーネーション! ……アネモネもある』

それは、彼女が手にした感情だった。

『ああ……。私、こんなに綺麗な世界を手に入れていたんだね』

もう彼女は、無味な世界を無闇に歩いていた少女ではなかった。少女は感激で、涙を流す。

これは、私なりの挑戦だった。無味な世界しか描けない私の、精一杯の感情表現。表現したいのは、自分の世界が色づいていく、あの高揚感。

大原雫は優しい笑みを浮かべる。

『そうだよね。全部、無駄なんかじゃなかった』

その胸に抱かれていたのは、「幸福の再来」を表すスズラン。

少女は客席——私たちに向かって、手を差し伸べる。

『さあ、この無味な世界に、彩を』

雫の影響でよりよい脚本を書くこうとする主人公の向上心は理解できる。
雫が求めていた世界をもう少し掘り下げて書いてほしかった。

中川先生

短い中に自己表現にまどう高校生が心を通わせる青春劇が丁寧に描かれていると思います。「無」から「豊かな情感へ」という展開はやや安直なところではありますが、コンパクトな中に劇中劇を盛り込んだり、花言葉という小道具があったり、工夫に感心しました。ショートショートによくある意外性やナンセンス等とは異なる筋立てですが、いやみなく読後感のよい作品です。

宮内先生

花言葉を活用するなど、工夫の見られる作品で、情景を想像し易く・読後感も良い短篇小説と評価できます。

しかし、この作品も「オチ」がなく、ショートショートとして評価するのは難しいと思いました。

なお、短編小説としての本作に注文をつけるとすれば、2枚目に登場する「私が初めて創り上げた物語について、もっと具体的に書くべきです。全体に説明してしまっていて、具体的な叙述(＝描写)に乏しい印象があります。」

小説は本来、説明するものではなく、描くもの。

それを意識して表現を見直し、推敲すればよりしっかりした短編小説に仕上げられると思います。丁寧に磨き上げて下さい。

酒井先生

【SNS 紹介】

中京大学図書館の公式 SNS アカウントはこちらです。

図書館で行われるイベントや企画について様々な情報を発信しておりますのでぜひフォローしてください！

X(旧 Twitter)	Instagram	Facebook
図書館に直接関わる情報を 知ることができます。	広報班が図書館に関する 情報を発信するアカウント です。	イベントや図書館の情報を 知ることができます。
		

編集後記

今号は前号で行った企画も踏まえつつ新しい記事も取り入れた内容になりました。

この記事を読んで少しでも中京大学図書館や文学作品について興味を持っていただけたら嬉しいです。

また、広報班のメンバー同士で予定が合わないことや想定外のトラブルに見舞われることも多々ありましたが無事にクリブニュースを完成させることができました。

募集企画の際にご参加、ご協力いただき誠にありがとうございました。皆様のおかげでより読み応えのあるものを作り上げることができました。

最後に審査にご協力いただいた酒井先生、中川先生、宮内先生、活動を支えてくださった中京大学図書館事務課の下林さんにも心から感謝申し上げます。

クリブニュース広報班一同